



陽気は幸せの種

# 陽気だより

図書出版 養徳社  
〒632-0016  
天理市川原城町388  
TEL 0743 (62) 4503  
FAX 0743 (63) 8077

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.61

2012.4.15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で63年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

## 人気のかげに

### 原節子という女優

文字通り星の数ほどある映画スターのなかで、都会と田舎、男女を問わず圧倒的に人気のあるスタアは、といえば原節子をおいて他にいない。しかも、その人気は、戦前から戦中、戦後に引きつづき、ここ十年不変のものである。原節子とは、それほど人気のある大スタアである。彼女の魅力はどこにあるのだろうか？そして、こんにちの原節子の人気を築いたものは何だろうか？

一口にいつて、原節子の人気の最大拠点は、その処女性である。

日本の映画ファンは、大多数が未婚の年齢層に占められている。昔から人気女優ほど恋愛ゴシップに神経を使い、法律的には正式な結婚であっても、その事実をファンたちの前に何か罪悪のように隠したがる傾向がある。特定の恋人、特定の配偶者を彼女らがつくることは、若い映画ファンたちの前から、スクリーンの共通の恋人である映画女優の最大の魅力を自らの手で剥ぎ取るにひとしいということになるせいだろうか。事実、結婚したとたんプロマイドの売れ行きが急速に落ちた女優の例はいくらでもある。

原節子のスタアへの登竜門は、彼女の姉婚に当る当時の日活監督熊谷久虎によって開かれた。

熊谷は石川達三の(第一回)芥川賞受賞作品「蒼氓」をはじめ「情熱の詩人啄木」など、一連のすぐれた文芸映画をつくって、第一級の監督として日本映画界に君臨していた。

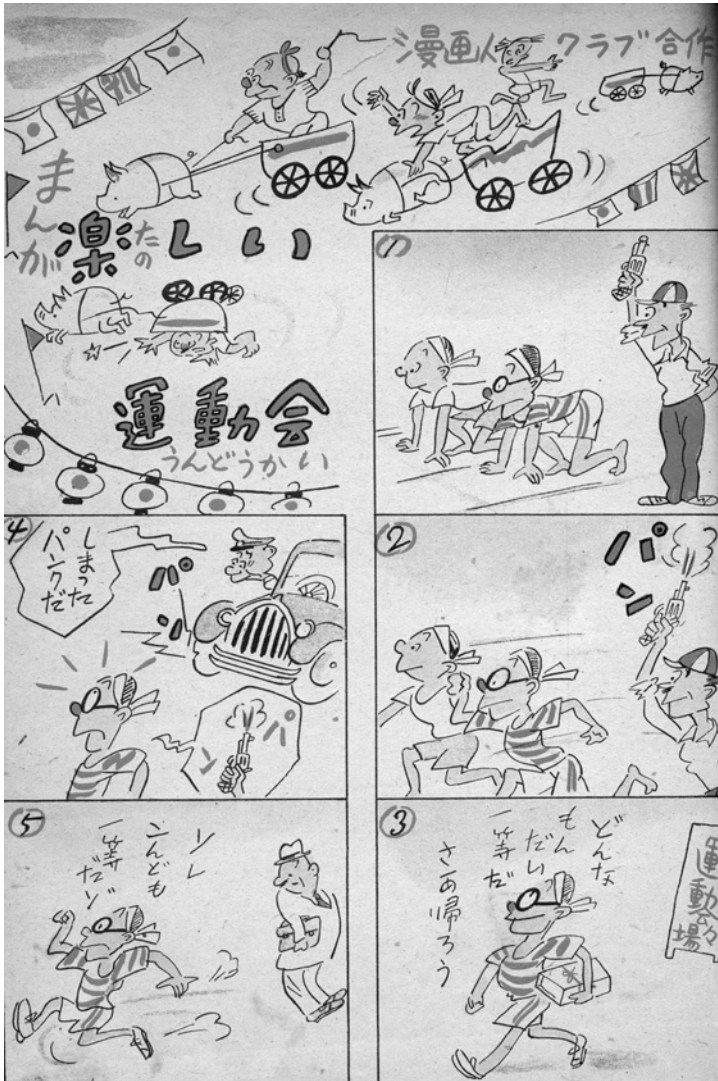
「昌ちゃん、君、一度映画に出てみないか」

冗談のような誘いが、ほんとになって、「ためらう勿れ若人よ」という青春映画に端役で初出演したのが、原節子のスクリーンへのスタートになった。彼女の本

名は会田昌江である。その第一回出演はほんの端役だったが、天才山中貞雄の眼にとまって第二回目に山中の「河内山宗俊」に出たのを、さらに当時日独提携映画「新しき土」を撮影のため来朝中だった独逸人監督アーノルド・ファンクに注目されて、第三回出演は小杉勇の相手役で「新しき土」に出演。そしてそのフィルムと一緒にふるふるベルリンに渡り、日本のあでやかな振袖姿で碧眼の人たちに舞台挨拶をした。

ときに彼女、十七才。——一夜明ければシンデレラ、のまことに輝かしいスタア誕生であった。

(後略)



## 眞実の道 (道友社刊より)

### 人力の儂さ

かつて恩師岩川教授が愛児を失われた時、学会で涙の講演をされたことがある。病氣はきわめてありふれたジフテリアであった。

同教授は小児科学界の権威であり、尙(く)瘵(れい)病の研究では日本でも有名な臨床家であるから、わが子の病氣を見逃されるはずはない。

又、恩師のために、教室全員をあげて看護にあたったのであるから、手当ては粗漏(そろう)のあるはずもない。

しかし、咽喉(のど)の病氣はなおっているのに、真夏のこととて、暑さのために、どうしても体力がつかない。暑さをしのぐために病室には水柱を立て、扇風機で冷たい風をおくり、人力の限りをつくして自然とたたかったが、ついに及ばず、発病一カ月目に不幸の転帰(てんき)をとられた。ところがその翌日から気温がさがって、涼しい風が気持ちよく頬をなでるようになって

た。ああこの風がもう一日はやく吹いてくれたらと、一同空を仰いで嘆息(たんそく)をもらしたのであった。

岩川教授は、自分はここで初めて宿命というものを感じた。人間の力をもつて



自然の流れに逆らうことはできない。人間のからだも命も、すべては大自然の摂理(せつり)によって導かれていくということがわかった。科学者としての人生観を変えなければならぬ、としみじみ述懐(じゆくわい)された。(医学者としての私の信仰)

## 神秘

この宇宙の幾多の科学的事実を神を示している。その例を少しあげれば、地球は地軸を中心として一時間に一千マイル(約1600キロ)の速度で自転するのであるが、もしこれが百マイルになると昼も夜も今より十倍長くなり、昼の烈しい太陽の光は生物を焼きつくし、夜の長さは生物を凍え死なせるだろう。

又、太陽はその表面において、華氏一万二千度(摂氏・約6650度)であるが、地球はちょうど具合よく温められる距離にあり、もし太陽の放熱が現在の半分としたら私どもは凍死するし、又反対に五割多かつたら黒焦げとなるであろう。

月との距離も、もし現在より五万マイル遠く離れていたとしたら、潮の満干は非常に大きなものとなり、陸地はすべて一日に二回水浸しになる。さらに又、もし地かくが現在より十フイート(約3メートル)だけ厚かつたとしたら、地球には酸素がなくなり、動物は死んでしまう。もし、又大洋が今より数フイート深かつたとしたら、

二酸化炭素と酸素とは吸収されてしまい、一本の草木も存在しないだろう。

たなくとなに事にてもこのよふわ

神のからだやしやんしてみよ (三・四〇)

## 養徳社 よもやま話

〇……三月二十五日から二十七日まで、天理本通り「ギャラリ一おやさと」にて、青山文治先生の85歳・絵画作品展を開催しました。お陰さまで、三日間の入場者数は約一五〇〇名。大盛況でした。展覧会にあわせて会場外で販売させていただいた先生の著書『思い出のスケッチ』も、来場者の方が多数お買い求めくださいました。天理中学時代の先生の教え子であられる真柱様、奥様もご来場くださり、先生と楽しく話されるお姿が印象に残りました。

ご来場くださったみなさま、ありがとうございました。青山先生もたいへん喜ばれ、「まだまだ描こうという気になりました」とおっしゃっています。

今年一年、『陽気』の顔を飾る青山先生の表紙絵、今後とも楽しみにしてください。

〇……四月十八日に、『人間がたすかる原理―「天の理」を解きほぐす―』(中臺勘治著)を、二十六日に『親ひとすじ―大竹忠治郎の「手記」解説―』(矢持善和著)が発刊。『陽気』五月号に新刊案内を掲載しています。今までのない斬新な切り口の実践教理書と、ブラジル伝道の

父・大竹忠治郎氏の信仰足跡を綴った手記回想録の二冊です。

新刊4月26日発行

# 親ひとすじ

大竹忠治郎の「手記」解説

——ブラジル伝道の父と慕われた大竹忠治郎の少年期、

移民開拓、布教伝道、拘留、戦後の歩み等の回想録——

矢持善和著

(天理大学教授)

A5判・定価1,260円(税込)

養徳社

天理市川原城町388  
☎(0743)62-4503  
http://yotokusha.com/